

10:10-10:45 発表①

日本イスラーム美術研究史（1945－2025）

門井由佳（ウィーン大学）

本発表は、日本におけるイスラーム美術研究の戦後 80 年の歩みを振り返り、時代ごとの研究動向の変遷を整理しつつ、日本における受容の特質と今後の課題を提示することを目的とする。日本のイスラーム美術研究は、戦後の混乱期を経て、1970～80 年代以降の中東地域への学術調査団の派遣を契機に本格的な発展を遂げた。西アジアや中央アジアにおける遺跡発掘や遺物調査は、実物資料に基づく実証的な研究基盤を大きく前進させた。さらに 1990 年代以降は、国際交流の拡大や多様な学際的アプローチの導入に伴い、研究対象の多角化が急速に進んだ。写本芸術や陶磁器、建築といった伝統的な造形美術の分析にとどまらず、アジア・ヨーロッパとイスラーム世界を結ぶ東西交流史の視点が加わったことで、研究視野は一層深化している。

10:45-11:20 発表②

アルハンブラの「翻訳」と移動 ―カール・フォン・ディービッチュとゲズィーラ宮殿

佐藤紗良（独立研究者）

本発表は、学振研究員として梶屋先生に指導いただいた期間に行った研究をまとめたものであり、プロイセン出身の建築家カール・フォン・ディービッチュ（1819-1869）に焦点を当てたものである。19 世紀、ナスル朝のアルハンブラ宮殿は、ヨーロッパの建築家や美術家によって研究・図像化され、その装飾語彙は「ムーア風」「アルハンブラ風」の意匠として各地に取り入れられた。1840 年代にグラナダを訪れたディービッチュは、アルハンブラを実見した後ドイツでムーア風建築や鋳鉄製装飾を作成した。そこではアルハンブラは、近代的な素材や技術によって再構成可能な装飾体系として扱われた。こうした「翻訳」は、1869 年のスエズ運河開通祝典のため建設されたゲズィーラ宮殿において、異なる政治的・文化的文脈のもとで展開された。本発表では、ドイツで再構成されたアルハンブラのイメージと造形語彙がイスマール期エジプトでいかに「翻訳」されたのかを追い、19 世紀のイスラーム建築受容を、建築家・図面・素材・技術を介した様式の移動・変換として考察する。

（休憩 15 分）

11:35-12:10 発表③

明治期以降の日本の芸術家とイスラーム美術―洋画家と日本画家における受容の違いをめ

ぐって

鎌田由美子（慶應義塾大学）

榊屋友子先生の2007年の論文「日本とイスラーム美術」を引き継ぎ、明治期以降の洋画家と日本画家におけるイスラーム美術受容の相違を考察する。20世紀初頭以降、岡田三郎助、児島虎次郎、富本憲吉、南薫造、吉田博ら洋画家や工芸家は、渡欧先で予期せずイスラーム美術と出会った。この邂逅は彼らが西洋志向を省み、東洋の芸術伝統の重要性に目を向ける契機となった。一方、岡倉天心やタゴールの影響で東洋・仏教美術の起源であるインドへ渡った荒井寛方ら日本画家は、ムガル絵画などのインド・イスラーム美術と遭遇した。「線」を重視する日本画家にとって細密な線描を誇るイスラーム絵画は驚嘆の対象であり、村上華岳のように、日本に居ながら出版物を通じてムガル絵画に影響を受けた作品を生み出す者も現れた。本発表では、西洋志向を反省することになった洋画家たちと、「線」への親和性からイスラーム絵画に触れた日本画家たちに見られる差異に着目する。

12:10-12:45 発表④

アナトリアの宮殿と装飾文化―榊屋先生のご研究にお答えして

川本智史（東京外国語大学）

榊屋友子先生は博士論文で、イルハン朝時代に宮殿が置かれたタフテ・ソレイマーン遺跡を論じられている。建築史を専攻していた報告者は学部・修士時代に榊屋ゼミに参加し、また先生のお手伝いとして出土した彩釉タイルのデータベースを作成した思い出がある。その後、修士論文ではクーバーダバード宮殿をはじめとするルーム・セルジューク朝の宮殿群と移動宮廷を、博士論文ではオスマン朝初期の宮殿群を空間的観点から考察したが、実はきちんと研究のお話しもできないまま先生は旅立たれてしまった。先生のご研究にお答えするかたちで、中世ユーラシア世界からアナトリアに移入された宮殿建築と、装飾文化について紹介すると共に、オスマン朝の宮殿との比較をおこなう。ビザンツ世界の建築文化を基盤にすえつつ、ティムールの遠征などを契機として東方の要素が流入したオスマン宮殿の成立を論じる。

（昼食休憩 75分）

14:00-14:35 発表⑤

首都アンカラにおけるモスク建築にみる伝統の解釈―コジャテペ・モスクとトルコ大国民議会モスクを中心に―

山下王世（立教大学）

現代トルコにおけるモスク建築には、歴史的な建築様式を継承するものから、従来の形式にとらわれない現代的なものまで、多様な展開がみられる。本発表では、首都アンカラに

建設されたコジャテペ・モスク（1967 年着工、1987 年完成）とトルコ大国民議会モスク（1989 年完成）を取り上げ、それぞれの成立過程や建築的特徴を概観する。コジャテペ・モスクでは、当初のモダニズム的設計案が変更され、最終的にオスマン古典期のモスク建築を参照する記念碑的な構成が採用された。一方、トルコ大国民議会モスクでは、ドームやミナレットなどの定型的な建築要素を用いず、初期イスラームの礼拝空間を参照しつつ、キブラや礼拝者の列、自然との関係を重視した空間が構想された。両者は、外観や空間構成において大きく異なるが、いずれも現代社会におけるモスク建築のあり方を考えるうえで重要な事例である。これら二つのモスクを比較しながら、現代トルコのモスク建築において「伝統」と現代性がどのように捉えられてきたのかを検討する。

14:35-15:10 発表⑥

中世デリーにおけるムスリム宮殿建築と水ー東京大学インド史跡調査団の資料から

深見奈緒子（上智大学）

12 世紀末、デリーにムスリム政権が成立して以来、16 世紀半ばのスール朝の終焉まで、デリー平原にはいくつかの城塞都市が築かれ、城塞の内部に宮殿が営まれた。ただし既往研究は限られ、また遺存状況は完全ではない。しかしながら、その構成をほぼ同時代のビーダルやマンドゥーの宮殿と比較を行い、中世デリーにおけるムスリムの宮殿建築について言及したい。

一方、デリー・リッジを中心にいくつかの離宮建築がインド史跡調査団（東京大学東洋文化研究所にて 1959 年から 1961 年踏査）の資料に残る。それらの離宮は水施設と関連している。また、数多くの水施設も報告されている。デリーの立地と都市の移動、水施設との関係についても考察を行いたい。

梶屋友子さんは、東洋文化研究所に着任して以来、インド史跡調査団の資料保存について数々の努力をされてきた。本発表は、彼女と約束を果たすために、インド史跡調査団の資料を論文へと繋げていく第一歩としたい。

（休憩 15 分）

15:25-16:00 発表⑦

ペルシア語韻文版『カリーラとディムナ』（1260 年頃）の受容ーバヤズィト 2 世期における『王書』およびセルジューク史参照の文脈からの検討

神田惟（東京外国語大学）

梶屋先生がライフワークとされたイル・ハーン朝期のタフテ・スレイマーンに関する研究（Masuya 1997 ほか）がもたらした重要な視座の一つは、ガズナ朝君主マフムードに献呈されたフィルダウシー『王書』に由来する銘文やモチーフが、1270 年代に、遊牧生活を送るモンゴル系君主の夏宮殿の装飾プログラムにどのように採用されたかという問いである。本発表では、この視座を踏まえ、1260 年頃にルーム・セルジューク朝君主カイカーウス 2 世に献呈されたペルシア語韻文版『カリーラとディムナ』の後世における受容を検討する。

まず、同作の成立背景を検討し、『王書』とナスルッラー版『カリーラとディムナ』を典拠としながらも、献呈相手とセルジューク家を称揚する詩句を随所に挿入することで、動物寓話に頌詩的性格を付与した特異な作品であることを指摘する。その上で、唯一挿絵を伴う CSMVS ムンバイ所蔵写本（1495 年筆写）が、15 世紀末にオスマン朝君主バヤズィット 2 世の図書館に収蔵されていた可能性が高いことを示す。以上を通じて、同作が当初の献呈先とは異なる宮廷で新たな価値を見出され、受容された過程を論じる。

16:00-16:35 発表⑧

イスラーム写本絵画における視覚表現の展開－梶屋友子氏の研究から再考する－

林則仁（龍谷大学）

本発表では、梶屋友子氏のイスラーム写本絵画研究を手がかりに、イスラーム圏における絵画表現の展開と、その背景にある多様な視覚文化の交差について考察する。梶屋氏は、写本絵画の画面構成や場面表現、図像のあり方を丹念に読み解き、イスラーム美術を理解するための豊かな視点を提示してきた。本発表では、こうした研究をあらためて振り返りながら、「大モンゴル『シャー・ナーメ』」や『集史（歴史集成）』をはじめとする写本絵画を取り上げ、15 世紀ペルシア絵画に至る表現の展開を検討する。とりわけ、異なる地域や時代に見られる図像の共通性と差異に注目し、視覚表現が受容され、変化し、新たな絵画世界を形づくる過程を考えたい。梶屋氏の著作や論文との対話を通じて、イスラーム写本絵画をあらためて見つめ直すとともに、その研究が私たちに開いてきた問いと可能性について考察する。

（16:35-17:20 総合討論）

（17:20-17:30 閉会挨拶）